

# 現代日本のサブカルチャーにおける 仏教的人間観について

—漫画、コマーシャルフィルム、  
テレビドラマの登場人物における仏教思想—

Buddhist Views of Humanity in Contemporary Japanese Subcultures:  
Focusing on a Comic, Commercial Film, and Television Drama

MIURA Hirofumi

三浦宏文

共通教育科目非常勤講師

## 抄録：

本稿では、現代日本のサブカルチャーにおける仏教的人間観について、漫画『町田君の世界』とコマーシャルフィルム「なーちゃんシリーズ」、そしてテレビドラマ『過保護のカホコ』を取り上げて考察した。『町田くんの世界』の町田一とCF「なーちゃんシリーズ」のなーちゃんの二人に共通する性格として仏教の「慈悲」を読み取ることが出来た。また『過保護のカホコ』の嘉穂子は、『法華経』に出てくる常不軽菩薩に通底する生き方を見ることが出来た。

## Abstract：

This study examines Buddhist views of humanity in contemporary Japanese subcultures, using the comic “Machida-kun no Sekai (Mr. Machida’s World),” a commercial film “Naa-chan Series,” and television drama “Kahoko no Kahoko (Overprotective Kahoko).” The analysis demonstrates the *maitrī* (compassion) of Buddhism as a common trait between Hajime Machida in “Machida-kun no Sekai” and Naa-chan who is the protagonist of the “Naa-chan Series.” In addition, Kahoko’s way of life in “Kahoko no Kahoko” resembles a Bodhisattva such as Sadāparibhūta in *The Lotus Sūtra*.

キーワード：仏教的人間観、サブカルチャー、『町田くんの世界』、コマーシャルフィルム、『過保護のカホコ』、慈悲、『維摩経』、『法華経』、常不軽菩薩、宮沢賢治

**Keywords** : Buddhist views of humanity, Japanese subculture, “Machida-kun no Sekai (Mr. Machida’s World),” Commercial films, “Kahogo no Kahoko (Overprotective Kahoko),” the *maitī* (compassion), *Vimalakīrti-nirdeśa*, *The Lotus Sūtra*, *Sadāparibhūta*, Kenji Miyazawa

## はじめに

本稿では、現代日本のサブカルチャーにおける仏教的人間観について考察していきたい。より具体的には、漫画『町田君の世界』と商業フィルム（CF）「なーちゃんシリーズ」、そしてテレビドラマ『過保護のカホコ』を取り上げ、各作品の登場人物の性格や特徴、そしてその行動規範に表れる仏教思想及び仏教的人間観について論じていきたい<sup>1</sup>。

### 1 理想的人間像（ヒーロー）について

日本のサブカルチャー作品では、様々な形で理想的人間像（ヒーロー）が描かれてきた。主として漫画やアニメーションや特撮ヒーローものでの理想的人間像（ヒーロー）は、優れた頭脳や身体能力を持ち、強大な敵や絶望的な困難にもひるむことなく立ち向かう少年少女がまさにそういう存在であろう<sup>2</sup>。彼や彼女は勇気や決断力を持ち、強い信念とあきらめない心をもっている。そういう点に読者や視聴者は魅かれる。古くは漫画・アニメーション『ドラゴンボール』<sup>3</sup>の主人公孫悟空や『美少女戦士セーラームーン』<sup>4</sup>の月野うさぎとセーラ戦士たち、最新の者で言えば2020年に大ヒットを記録したアニメーション映画『鬼滅の刃』<sup>5</sup>の主人公竈門炭治郎がその例といえるだろう。

ところが、こういう「ヒーロー」とは全く異質の理想的人間像（ヒーロー）を描いた漫画作品がある。安藤ゆきによる『町田くんの世界』<sup>6</sup>である。

### 2 『町田くんの世界』の町田一

#### 2-1 町田一という人物

『町田くんの世界』の主人公、町田一（まちだはじめ）は眼鏡の、一見すると優等生に見える高校生だ。だが、町田一は勉強が全くといっていいほどできない。クラスメートの栄があるテストの点数が64点だったので一に分からない所を教わろうとしたが、一はそれより悪い38点だったりする。しかも勉強しないからなのではない。彼なりに努力しているのだが要領が悪く点数に結びつかないのだ。「ごめんね、見かけ倒しで」と謝罪する一に栄の方が恐縮する始末である<sup>7</sup>。

町田一は運動もできない。50メートル走るタイムがなんと12秒4である。体育教師に「はっきり言うが女子レベルのタイムだな。それも運動神経の悪い方の女子だ」と言われてしまう。その体育教師は親切心から「だがな、人には得手不得手がある。町田は町田の体育以外の！得意分野を伸ばせばいいだけだからな！」と一を励ます。一は、そのおせっかい過ぎる激励に少し傷つ

きながらも、あまり表情を変えずにその場を去って行く。<sup>8</sup>では、町田一の得意分野とは何なのであろうか。それは、人のことを思いやることである。

## 2-2 町田一の得意分野

一は、兄妹げんかする弟や妹をやさしく諭し仲直りさせる。決してけんかをしたどちらが正しいかなどという判定はせず、それぞれの良い点悪い点を言い聞かせて仲直りさせる。素直に誤った妹には、「素直にあやまれる子はいいい子だよ」と頭をなでる。<sup>9</sup>

重い資料を運ぼうとする中年女性の教師には「私が持っていきます」と声をかけ荷物を持ち、張り紙を貼ろうとして苦勞している女子生徒がいたらすっとフォローして貼ってあげる。<sup>10</sup>

野球部のボールが頭におつかっても、怒るどころかそのボールを取りに来た野球部員に「レギュラー入りおめでとう！」と言ってボールを投げ返す。野球部員は、「どうして知ってるんだ」と困惑しながらも「ありがとう」とちょっと頬を赤らめて答える。<sup>11</sup>

かつて自分を見下していた同級生から頭を叩かれながらいじられていた友人を、「俺の尊敬する人を、あんまり気安く叩かないでくれよ」と言って助ける。<sup>12</sup>町田一の行動は、一事が万事こういう感じなのだ。

そんな一の周りの人間たちは、どんどん一に「オトされて」行く。(この作品では、一に好意を持ち始めることを「オトされる」と表現している)両親が不仲であることが原因で人間が嫌いになってしまった猪原は、「僕は人間が好きだ」という一のやさしさに触れて恋に堕ちてしまう。その猪原のことが好きで一に仲を取り持ってもらおうとした西野は、結局猪原にはふられてしまうが、その時の一との触れ合いがきっかけで一のことを大好きになってしまう。<sup>13</sup>

美形でモデルもやっている同級生の氷室は、あまりに周りからちやほやされていたために人の気持ちも自分の気持ちも分からなくなっていた。だがその氷室も、一の誠実な忠告を聞き一のことをかけがえのない友人として認識し始める。<sup>14</sup>

## 2-3 優しさで他者の人生を変えて行く

町田一は、人を愛し人から愛される。人のことを思いやり愛することで、次々と周りの人を「オトして」行く。人にやさしくすることで、人から慕われ頼られるようになる。そして一に出会って「オトされた」人々は、一を好きになることで自分自身の人生をもポジティブに変えて行くのである。

## 3 メンソレータム CF 「なーちゃんシリーズ」のなーちゃん

### 3-1 なーちゃんという少女

この町田一にそっくりな人物が、メンソレータムのコマーシャルフィルム (CF) 「なーちゃんシリーズ」に出てくるなーちゃんである<sup>15</sup>。なーちゃんは、メンソレータムのロゴにあるリトルナースをモデルにした架空の少女だが、彼女のおせっかいぶりは凄い。

同級生の男子の寝ぐせを直してあげたり、釣りをするおじいちゃんに魚のいる場所を教えたり、溝に脱輪した軽トラックを助ける陣頭指揮をとったり、むずかる幼児を一生懸命笑わせてあげたりと、目に飛び込んでくる人々を片っ端からお世話しようとする。

そのなーちゃんが、駅で倒れた自転車を一台ずつ起こしていた時、ずっとなーちゃんが気になっていた同級生のゆきちゃんは、たまらなくなって「一緒にやろう！」と声をかける。そして、二人で自転車を起こし始めるのである。なーちゃんも、そのおせっかいにすら見えるやさしさの行動で人に愛され、人を変えて行く。

### 3-2 なーちゃんと町田一の共通点

ここでなーちゃんと町田始めの人物像を比較してみたい。町田一はこのなーちゃんほどおせっかいではないが、目に映る人々すべてのことを思いやろうとする。同級生の栄さんのことばで言えば「町田は全人類を家族だとおもっている」<sup>16</sup>のだ。その一の思いやる行動によって、周りの人たちは少しだけ幸せになり、少しだけ自分の人生をポジティブにとらえ直そうと思っていく。

このなーちゃんと町田一の両方に共通するのは、これまでのサブカルチャー作品で描かれた理想的人間である「勇気や決断力を持ち、強い信念とあきらめない心で何かを成し遂げる」人間とは大きく異なる人物であるということである。むしろ二人はそのような英雄的人物ではなく、ごくごく平凡な人間に属する。ただやさしさという点のみで他者とは異なっており、そのやさしさで他者に働き掛け動かして行くという個性が一般人と異なっているだけである。

### 3-3 二人の共通点としての「慈悲」

この二人の共通点に関連する仏教の根本教義に「慈悲」がある。この「慈悲」とは標準的な仏教辞典では「仏がすべての衆生に対し、生死輪廻の苦から解脱させようとする憐愍の心」であり、「智慧と並んで仏教が基本とする徳目」であるとされる<sup>17</sup>。現代日本ではすでに日常語化しており、「いつくしみ、あわれむ心。また、なさけ深い様子」といった意味で使用されている<sup>18</sup>。だがむしろ偽善とセットで語られる悲しい事態まで起きているのが現実である。

しかし町田くんとなーちゃんは、この慈悲という概念の内実に改めて生き生きとした魅力を吹き込んでくれる人物像だと考えられる。この二人のヒーローとヒロインの武器こそが、本来の仏教用語に近い内実を持った慈悲なのだ。彼や彼女は、自分の持つ慈悲の力によってことごとく出会う人を「オトして」行く。そのことによって「オトされた」人たちは少しだけ幸せになると同時に自分も慈悲の力を手に入れる。これは『維摩経』(Vimalakīrti-nirdeśa sūtra) 菩薩品第四に出てくる「無尽灯の法門」(akaṣayapradīpaṃ nāma dharmamukha) を思い起こさせる<sup>19</sup>。

### 3-4 『維摩経』について

『維摩経』は初期大乘仏教の代表的な経典であり、特に在家信者の立場から旧来の仏教を批判したという点が大きな特徴である。この『維摩経』は長らくサンスクリット原典が見つからず漢訳やチベット語訳で研究されていたが、1999年に大正大学の学術調査隊によってチベット・ラ

サのボタラ宮で発見された。内容的には、維摩という在家の仏弟子が病氣の見舞いに来た文殊菩薩たちと問答をして究極の境地を沈黙によって示すというものである。

### 3-5 無尽灯の法門

無尽灯の法門は、病を装いふせている維摩 (*Vimalakīrti*) のもとに釈尊 (*Śākyamuni*) が見舞いを送ろうと主だった弟子たちに声をかける。だが、いずれも維摩にやりこまれた経験を語り辞退する。そこで釈尊は菩薩達に向き直り、弥勒菩薩 (*Maitreya*)、続いて光厳童子 (*Prabhāvya*) に声をかけるが、やはりいずれも辞退する。次いで持世菩薩 (*Jagatindhara*) に声をかけるが、彼も同じく過去の因縁話をして辞退する。この持世菩薩の過去の因縁話に、無尽灯の法門が出てくるのである。

持世菩薩が家にいた所、魔王パーピーヤス (*pāpīyas*) がシャクラ (*Śakra*: 帝釈天) の姿になって、一万二千人の天女たち (*apsaras*) を連れてやってきた。持世菩薩はそれを見抜くことができなかったが、そこに維摩がやってきてそこにいるシャクラの姿をしたものが魔王パーピーヤスであることに気付かせる。その後、維摩と魔王の論戦となり、その結果魔王は天女たちを維摩に渡さざるを得なくなる。そこで維摩は天女たちに法を説き、天女たちは発心する。やがて魔王が戻ってきて天女たちを返すことを要求する。維摩はそれに従い天女たちを返すが、その時に天女たちに魔宮での過ごし方を教える。その教えが「無尽灯の法門」であった。<sup>20</sup> 維摩は天女たちにこのように語りかける。

「天女たちよ、無尽灯という法門があります。あなた方はそれを行じなさい。また、それはどんなものかという、天女たちよ、一つの灯から百千の灯が点火されても、その灯は消えることはありません。それと同様に、天女たちよ、一人の菩薩が百千者もの多くの衆生を菩提に安住させても、その菩薩の(悟りの)心の記憶は減らないし、むしろ増大するのです。そのように、(ある一人の人が)あらゆる善法を他の人々に対して宣言し、その善法を説くことに応じてあらゆる善法もさらに増大するのです。これこそが無尽灯という法門です。」<sup>21</sup>

このように維摩は、天女たちに善法を広めることを勧める。善法すなわち善い教えは、こうやって人から人へとどんどんと広がって行くものなのである。『町田くんの世界』の町田一は、そのやさしきで知り合う人々を「オトして」いき、その人の人生をポジティブにして行く。そのように他者にやさしきを手渡しても一のやさしきは消えることはないのである。メンソレータムのCFのなーちゃんも、おせっかいを多少嫌がられながらも確実にその慈悲の心は伝わっていく。そしてずっと声をかけられなかった同世代の少女に、勇気を出して「一緒にやろう」と声をかけてともに倒れた自転車を引き起こすのである。こうやって少しずつだが確実に善法すなわち慈悲の心を広めて行くのである。

この『町田くんの世界』の町田一とメンソレータムのCFのなーちゃんという架空の物語作品(映像作品)の登場人物の性格や行動の描写には、この物語の作者(CFの企画者)が意識する

としないと関わらず、仏教の「慈悲」や『維摩経』の「無尽灯の訪問」の思想を読み取れる。この二つの作品には、理想的人間像として仏教思想を体現した人物が存在していたのである。

#### 4 ドラマ「過保護のカホコ」のカホコ

さらに、もう一つの理想的人間像を表している『過保護のカホコ』というテレビドラマの主人公・根本加穂子について取り上げてみたい。具体的には加穂子と『法華経』という經典に出てくる常不軽菩薩との比較を通じて、理想像としての「デクノボー」について考察する。

##### 4-1 『過保護のカホコ』について

『過保護のカホコ』は2017年7月から9月にかけて毎週水曜日に日本テレビ系で放送されたテレビドラマである<sup>22</sup>。高畑充希が演ずる主人公の根本加穂子は、優しい両親、特に母の泉（黒木瞳）にあまりに過保護に育てられていた。彼女は大学4年生になっているにも関わらず朝着一く服すら自分で決められず母に助言を求める。そして母の作った心尽くしのお弁当を大学に持参し、帰宅時には駅まで母に車で迎えに来てもらうという生活である。したがって、大学4年の就活生であるにも関わらず職業に関する知識もなく自分のやりたいことも明確にならず1社も内定がとれない。そのような時にふとしたことから同じ大学の学生で画家を目指している麦野初（竹内涼真）に出会う。彼は両親ともおらず養護施設で育ち、奨学金とアルバイトで稼ぐお金で大学に通う苦労人であった。だから彼は、家族が言いたくも言えなかった加穂子の考えの甘さをすげずけと指摘する<sup>23</sup>。加穂子は彼の言葉に最初は戸惑うが、正反対の存在である彼との出会いによって少しずつ成長していき、これまで依存していた母親から精神的に自立していく<sup>24</sup>。このように『過保護のカホコ』は、基本的に加穂子のビルディングス・ロマン（成長物語）として展開して行くのである。

##### 4-2 『法華経』における常不軽菩薩

一方、常不軽菩薩とは『法華経』の常不軽菩薩品に出てくる人物である<sup>25</sup>。彼は修行僧であるが、学習することも教えを説くこともせず、ただ出会う人出会う人にこう声をかけ続ける。

「私はあなた方を軽蔑しません。どうぞ菩薩への道を修行してください。きっと悟りを開けるでしょう」<sup>26</sup>

「あなたは悟りを開ける、すなわちブツダになれる」と約束することを仏教では「授記」というが、それは本来尊敬できる師から授けられるものであり、こんな通りすがりの怪しい修行僧からいきなり与えられるものではない。人々は彼を怪しみ、中には怒り出す人も出てきた。そして彼を馬鹿にして罵りあげた。しかし、彼はまったく怒らず声をかけ続けるのである。

そういう状況なので、「ふざけるな」という怒りから石などを彼に投げつけてくる人もいた

が、これに対して彼は、石などが届かない遠くまで逃げた上で「でも私はあなたを軽蔑しませんよ！」と叫び続けるというユニークな対応をする。これに対してキリスト教の言葉で「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」というものがある<sup>27</sup>。これは様々な解釈があるが、一般的には暴力には暴力で返さず、しかも決して屈しないという態度を示せという意味だと考えられている。一方常不軽菩薩は、まず逃げる。そして危険を回避した上で「私はあなたを軽蔑しない」と叫ぶのである。最終的にはどちらも自分の意志を貫くという強さを表現しているのであるが、一旦逃げるという常不軽菩薩の態度はなんとも人間的でユニークな印象を受ける。このようなことが常不軽のまわりで繰り返されていくうちに、いつしか人々は彼のことを「常に軽蔑しない」という彼の口癖から「常不軽」と呼ぶようになったのであった。

こうして常不軽菩薩は、反発され嘲笑されながらも「私はあなたを軽蔑しません」と呼びかけ続けた。そして死ぬ寸前になって常不軽菩薩は虚空から『法華経』を誦する声聞き、その功德で六根清浄<sup>28</sup>となりその功德から長大な寿命を得て長い間衆生に『法華経』を解くことになった。そして多くの人々を最高の悟りに導いたのである<sup>29</sup>。

#### 4-3 常不軽菩薩とカホコ

一方加穂子は究極的な箱入り娘であるために純粹すぎて無意識のうちに周りの人々をいらつかせたり振り回したりしてしまう。しかし彼女は常に「人を幸せにするために働きたい」<sup>30</sup>と考えて行動していた。大学4年になり絵で食べていくことの難しさから一般企業への就職をも真剣に考える麦野に対して加穂子は必死でこう声をかける。

「麦野君の絵はすっばらしいよ！ 見る人を本当に幸せな気持ちにさせてくれるもん。本当にピカソさんを越えるよ！だから絶対に絵をやめたらダメだよ！」<sup>31</sup>

この姿勢と言葉は、「私はあなたを軽蔑しません。あなたはきっと悟りを開けるでしょう」という言葉をかけ続けた常不軽菩薩につながるものと見ることが出来るだろう。常不軽も加穂子も、知識や頭のよさ、宗教的素質といったすぐれた能力がある人間ではない。ごく普通の、というより、むしろどこか抜けている感じのする欠点の多い存在である。一般的にインドの宗教は、すぐれた宗教的素質を持つカリスマ的な指導者が出てきて、その指導者の教えに従うという形のものが多い。しかし、この常不軽菩薩はやや例外的である。最終的には六根清浄を得て『法華経』の教えを感得するが、それまではむしろ加穂子と同じように頼りなく他者から鬱陶しがられるような存在であった。

加穂子は、このドラマの後半で自分のことを捨てた実の母との再会をためらう麦野の背中を押すことや、死期が近い祖母の病状を祖母の意向にしたがって家族に内緒にして自分の胸だけにしまい込むような行動を取る。そして麦野の切ない母への思いを受けとめて慰めたり、祖母ができるだけ自分の思い通りの余生を過ごせるように奔走したりするのである。また、チェリストを目指していた従妹の富田糸が手首のケガのためにチェロを諦めなければならなくなったことでぐれてしまっ

た時も、加穂子は糸を慰めようと全力を尽くす。<sup>32</sup> その行動は逆に糸をいらつかせ、糸は加穂子を罵倒する。しかし加穂子はその言葉に大きく傷つきながらも、糸を慰めることをやめないのがある。

このように、加穂子はその時々には誤解を受けあるいは相手の神経を逆なでしたりして、ののしられたり馬鹿にされたりする。それでも加穂子は、相手のための行動をやめない。これは罵られ石を投げつけられながらも「私はあなたを軽蔑しません」と声をかけ続けた常不軽の行動そっくりだと言える。

常不軽菩薩と加穂子に共通するのは、全力で相手の存在の肯定をすることである。二人は、すぐれた知力や説得力を駆使して相手の間違いを指摘し、相手を教え導くことはしない。それは悟りを得る前の常不軽や嘉穂子にはできない。彼と彼女に出来ることは、時にうるさがられても全力で相手の存在を肯定していくことである。そのために自分が傷つけられることも厭わない。

#### 4-4 宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』のデクノボーと菩薩としての生き方

さらに常不軽菩薩に関して、もう一人の人物が浮かび上がってくる。童話作家で詩人の宮沢賢治の『雨ニモマケズ』という詩に出てくるデクノボーである<sup>33</sup>。このデクノボーもこの二人に共通する点があると考えられる。ではその賢治の詩を見てみよう。

雨ニモマケズ  
風ニモマケズ  
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ  
丈夫ナカラダヲモチ  
慾ハナク  
決シテ瞞ラズ  
イツモシヅカニワラッテキル  
一日ニ玄米四合ト  
味噌ト少シノ野菜ヲタベ  
アラユルコトヲ  
ジブンヲカンジョウニ入レズニ  
ヨクミキキシワカリ  
ソシテワスレズ  
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ  
小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ  
東ニ病気ノコドモアレバ  
行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ  
行ッテソノ稲ノ束ヲ [#「束ヲ」はママ] 負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ  
 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ  
 北ニケンクワヤソショウガアレバ  
 ツマラナイカラヤメロトイヒ  
 ヒドリノトキハナミダヲナガシ  
 サムサノナツハオロオロアルキ  
 ミンナニデクノボートヨバレ  
 ホメラレモセズ  
 クニモサレズ  
 サウイフモノニ  
 ワタシハナリタイ

南無無辺行菩薩  
 南無上行菩薩  
 南無多宝如来  
 南無妙法蓮華經  
 南無釈迦牟尼仏  
 南無浄行菩薩  
 南無安立行菩薩<sup>34</sup>

この詩に関しては色々な解釈があるが、筆者の解釈はこうである。優秀で偉大な人間だと、周りに嫉妬やねたみを与えることもある。そのような存在になるよりもむしろデクノボーとして馬鹿にされ誰にも気にされない存在となり、困っている人のもとへ常にとんでいく。そういう生き方をしたい。そういう賢治の思いがこの詩に表れていると考える。賢治は熱心な『法華經』の信者であったので<sup>35</sup>、このデクノボー的生き方が常不軽菩薩に着想を得ていることは間違いないであろう<sup>36</sup>。

『過保護のカホコ』の主人公根本加穂子も、皆から過保護の世間知らずと馬鹿にされながらも、苦しんでいる人や悲しんでいる人の存在にいち早く気づき、その人のために一生懸命尽くそうとする。賢治のデクノボーと常不軽菩薩、そして加穂子の3人は同じ性格や行動原理を持っていると言えるであろう。それは仏教的に言えば菩薩という生き方である。

菩薩は一般的には自らの修行の完成（自利）と他者である一切衆生の救済（利他）の両方を求める生き方（自利利他円満）である。特に大乘仏教では自らの修行の完成だけではなく他者の救済も行うという点に力点が置かれることが多い。常不軽の生き方はまさに菩薩の生き方を示しており、デクノボーや加穂子の生き方はそれに重なる形で菩薩の生き方の一端を示していることが出来るだろう。

#### 4-5 存在の肯定

前述した常不軽が出てくる『法華経』は様々な教えが入っている大変奥深い經典であり、菩薩という概念にも様々な解釈がある。それについて内外の膨大な研究の蓄積があるが、筆者はこの常不軽菩薩が出てくる常不軽菩薩品という章のテーマの一つとして前にも述べた「存在の肯定」が挙げられると考える。一人一人の人間を、たとえ自分と異なり自分を馬鹿してくるような人であっても、その人の可能性を信じ存在を肯定し続けること。それが最終的に悟りにつながっていくのである。

常不軽菩薩の行動の中には「存在の肯定」という思想が表れていた。このことは、『過保護のカホコ』というドラマの根本加穂子の生き方を『法華経』の常不軽菩薩の行動と重ね合わせることで見えてきた。過保護に育てられた純粋すぎる女子大生の物語を通じて『法華経』の教えの一端を垣間見ることができたのである。このことは逆に考えれば、『法華経』の深淵な思想は、『過保護のカホコ』だけでなく様々なサブカルチャー作品を通じて現代的な関心から普遍化して語る可能性にあふれているとも言えるのではないだろうか。

#### 5 結語

以上、漫画『町田くんの世界』とCF「なーちゃんシリーズ」、そしてテレビドラマ『過保護のカホコ』に登場する人物の性格や行動原理を仏教思想との関連性という視点から考察してきた。そこから分かったことをまとめてみよう。

『町田くんの世界』の主人公町田一は、全人類を家族と思っているような優しい振る舞いによって触れ合う人々を前向きにさせることができる人物であった。またCF「なーちゃんシリーズ」の主人公なーちゃんは、やさしいおせっかいを繰り返すことで思わず他者に手伝おうと思わせる力を持っていた。この二人に共通する性格として仏教の「慈悲」を読み取ることが出来た。しかもその慈悲は、『維摩経』の「無尽灯の法門」で語られたように、人から人へと伝わって行き、なおそれは減ることがなく増大していくものであった。

また『過保護のカホコ』の嘉穂子は、『法華経』に出てくる常不軽のようにお節介さや強引さで人の心を逆なですることがありながらも、最終的には周囲の人々を幸福に導いていった。そこには、真摯に他者の幸福を願う「存在の肯定」という精神が見て取られた。これはやはり仏教の「菩薩」という生き方に通底するものがあつたのである。

このように仏教の思想、少なくともそのエッセンスの部分は、現代日本のサブカルチャー作品を通じて、現代日本の状況に合わせた形で再解釈ができる可能性を秘めている。今回は仏教的理想の人間像を3つのサブカルチャー作品に読み込んでみた。今後さらに解釈の可能性を探求していきたい。

## 〔注〕

- 1 本稿は、拙著『サブカル仏教学序説』ノンブル社・2022年の中のコラム②「町田くんとなーちゃん」及び終章「ドラマ『過保護のカホコ』と常不軽菩薩」をもとに、大幅に加筆訂正して論文化したものである。その上で、コロナ禍で立ち入り難しかった他大学の図書館などで参照出来なかった文献・資料などの追加研究の成果を反映している。
- 2 サブカルチャー全般というものではないが、少年漫画の登場人物に関する研究としては、例えば以下の研究がある。後藤聖紀「表現と感受の偏向性に関する研究～なぜ少年マンガの主人公は、めちゃんこ強くてカワイイ少年ばかりなのか?～」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』20巻第1号・近畿大学文芸学部・2008年9月。阿部修「少年漫画における好まれる主人公像の歴史の変遷－自称詞と年代による分析」『論文集』金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習編17・2022年。
- 3 ドラゴンボールに関してはあまりにも多くの関連作品が出ているのでこの作品群の整理だけで論文に成りそうだが、本稿の関連作品として原作漫画をあげておきたい。鳥山明『ドラゴンボール』ジャンプコミックス全42巻・集英社・1985-1995年。
- 4 武内直子『美少女戦士セーラームーン』講談社・1992-1997年。セーラームーンはこの武内直子による少女漫画『美少女戦士セーラームーン』に端を発するが、大きな影響力を持ったのはテレビ朝日でのアニメーション作品である。
- 5 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』全23巻・集英社・2016-2020年。この『鬼滅の刃』は吾峠呼世晴の漫画では完結しているが、テレビアニメとしては2023年9月現在展開中である。
- 6 安藤ゆき『町田くんの世界』全7巻・集英社・2015-2018(第1刷)。そしてこの『町田くんの世界』は石井祐也監督で実写映画化された(映画『町田くんの世界』パップ・2019年)。ただ実写映画は原作漫画とはやや内容的に異なる点が目立ち、賛否両論が出ている。本稿では、原作漫画をベースに論じている。
- 7 『町田くんの世界』1巻第1話22頁。
- 8 『町田くんの世界』1巻第1話24-25頁。
- 9 『町田くんの世界』1巻第1話10-11頁。
- 10 『町田くんの世界』1巻第1話36-37頁。
- 11 『町田くんの世界』1巻第1話39頁。
- 12 『町田くんの世界』1巻第3話116-119頁。
- 13 『町田くんの世界』1巻第3話122-125頁。
- 14 『町田くんの世界』5巻第15話133-168頁。
- 15 このCMはYoutubeで見ることが出来る。<https://www.youtube.com/watch?v=TOIsYyUUYdc>
- 16 『町田くんの世界』2巻第6話72頁。
- 17 中村元他編著『岩波仏教辞典 第二版』岩波書店・2002年・452頁。
- 18 Weblio辞典<https://www.weblio.jp/content/慈悲> (2023年10月7日確認)
- 19 『維摩経』に関しては『梵文維摩経-ボタラ宮所蔵本に基づく校訂-』大正大学総合佛教研究所梵語仏典研究会・大正大学出版会・2006年を定本に、高橋尚夫『維摩経ノート』ノンブル社I-V・2017-2019年(これには3種の漢訳とチベット語訳、及び3種の和訳も掲載されている)、高橋尚夫・西野翠訳『梵文和訳 維摩経』春秋社・2011年、植木雅俊『梵漢対照 現代語訳 維摩経』岩波書店・2011年を適時参照した。
- 20 この部分のまとめは西野翠『『維摩経』と無尽灯の法門』『大正大学総合佛教研究所年報』第38号・2016年を参照した。
- 21 『梵文維摩経』p.40, ll.7-15. 『維摩経ノート』II p.240-241.
- 22 2017年7月12日から9月13日までの全10回が水曜22時から23時までの枠で日本テレビ系列で放送された。公式ページ<http://www.ntv.co.jp/kahogo-kahoko/index.html> (2023年10月20日確認)
- 23 根本加穂子や麦野初の人物像に関しては、日本テレビ『過保護のカホコ plus～過保護のススメ～』宝島社・2017年が詳しい。
- 24 ドラマに関してはDVD-BOXに全話収録されている。日本テレビ『過保護のカホコ DVD-BOX』2018年・Vap。
- 25 『法華経』常不軽菩薩品。『法華経』に関しては多くの書物が出されているが、本書では坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上・中・下・岩波書店(岩波文庫)1962年～1967年、植木雅俊訳『梵漢対照・現代語訳 法華経』上・下・岩波書店・2008年、*Saddharmapundarika*, edited by H. Kern and Bunyiu Nanjio, St. Petersburg, 1912. (PDF版：[http://www.downloads.prajnaquest.fr/BookofDzyan/Sanskrit%20Buddhist%20Texts/saddharmapundarika\\_sutra\\_1912.pdf](http://www.downloads.prajnaquest.fr/BookofDzyan/Sanskrit%20Buddhist%20Texts/saddharmapundarika_sutra_1912.pdf))、『妙法蓮華経』(『大正新脩大蔵経』法華部・華嚴部第九巻)を参照した。
- 26 上記*Saddharmapundarika*, p. 378、『妙法蓮華経』50頁下。岩波文庫版下巻132～135頁、植木訳下巻366～369頁。
- 27 マタイによる福音書5:39。ここは「復讐をしてはならない」という項目のなかの一節である。『聖書 新共同訳-旧約聖書続編つき』日本聖書協会・一九八七・一九八八年・新8頁。
- 28 根はサンスクリット語のインドリヤ(indriya)でここでは感覚器官の意味であり、したがって六根とは眼根・耳根・鼻根・舌根・身根の五つの感覚器官と思考器官である意根のことを指す。この六つの器官の汚れが煩惱の原因とされ、六根清淨はその汚れが除かれて心身ともに清らかになった状態のことを指す。『法華

- 經』法師功德品で『法華經』を信仰する者への功德とされている。中村元他編『岩波仏教辞典第二版』岩波書店・二〇〇二年・一〇七六頁などを参照
- 29 この要約に関しては、渡辺照宏『法華経物語』岩波書店（岩波現代文庫）・2014年及び菅野博史『法華経 永遠の菩薩道』大蔵出版・1993年を参照した。
- 30 この言葉は『過保護のカホコ』第1話で麦野からの「何のために働くのか」という問いに対する答えとして加穂子が苦しみ抜いて出した答えである。
- 31 この加穂子の言葉は、第1話で麦野にだまされてアルバイトを手伝わされた後疲れて眠っている所を麦野が描いた似顔絵を見て発したものである。以来加穂子は、ことあるごとに麦野に対して言っている。
- 32 これは連続ドラマの1年後に放送されたスペシャルドラマ『過保護のカホコ～2018 ラブ&ドリーム』でのエピソードである。
- 33 この宮沢賢治の詩と菩薩の関連性に関しては、松本史朗『仏教への道』東京書籍（東書選書）1993年の第4章に大いに示唆を受けた。
- 34 『【新】校本宮澤賢治全集 第十三巻（上）覚書・手帳 本文篇』筑摩書房・1997年。（青空文庫版：[https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630\\_23908.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630_23908.html)）
- 35 宮沢賢治と仏教の関係性についての総合的な研究成果としては大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』北辰堂・1992年がある。これはこれまでの宮沢賢治文学と宗教（仏教）に関する様々な著者の論文を集めた論文集となっている。
- 36 この「雨ニモ負ケズ」の詩と法華経の常不軽菩薩の関係性については菅原論貴「宮沢賢治の仏教世界-「雨ニモ負ケズ」考-」『禅研究所紀要』28巻・愛知学院禅研究所・1999年が詳細に検討している。また、この「雨ニモマケズ」の宮沢賢治文学における評価について論争があったが、分銅惇作はその核心に触れ決して低い評価をすべきでないとしている。分銅惇作「宮沢賢治における宗教意識-法華信仰と『春と修羅』の世界」『東京教育大学文学部紀要・国文学漢文学論叢』一三輯・1968年（大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』北辰堂・1992年所収）。

## 〔参考文献〕

### I サンسكريット語文献

- Saddharmapundarika*, edited by H. Kern and Bunyiu Nanjio, St.-Petersbourg, 1912. ([http://www.downloads.prajnaquest.fr/BookofDzyan/Sanskrit%20Buddhist%20Texts/saddharmapundarika\\_sutra\\_1912.pdf](http://www.downloads.prajnaquest.fr/BookofDzyan/Sanskrit%20Buddhist%20Texts/saddharmapundarika_sutra_1912.pdf))
- Vimalakirti-nirdeśa*, A Sanskrit Edition Based upon the Manuscript Newly Found at the Potala Palace, Study Group on Buddhist Sanskrit Literature THE INSTITUTE FOR COMPREHENSIVE STUDIES OF BUDDHISM, Taisho University, Tokyo, 2006. (『梵文維摩経-ポタラ宮所蔵本に基づく校訂-』大正大学総合佛教研究所梵語仏典研究会・大正大学出版会・2006年)

### II 漢文文献

- 『妙法蓮華経』鳩摩羅什訳『大正新脩大蔵経』第九巻法華部・華嚴部, 大蔵出版, 1925年

### III 邦文文献

- 阿部修「少年漫画における好まれる主人公像の歴史的変遷-自称詞と年代による分析」『論文集』金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習編 17・2022年
- 安藤ゆき『町田くんの世界』全7巻・集英社・2015-2018（第1刷）
- 植木雅俊訳『梵漢対照・現代語訳 法華経』上・下・岩波書店・2008年
- 植木雅俊訳『梵漢対照 現代語訳 維摩経』岩波書店・2011年
- 大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』北辰堂・1992年
- 菅野博史『法華経 永遠の菩薩道』大蔵出版・1993年
- 後藤聖紀「表現と感受の偏向性に関する研究～なぜ少年マンガの主人公は、めちゃくちゃ強くてカワイイ少年ばかりなのか?～」『文学・芸術・文化：近畿大学文学芸学部論集』20巻第1号・近畿大学文学芸学部・2008年9月
- 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』全23巻・集英社・2016-2020年
- 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上・中・下・岩波書店（岩波文庫）1962-1967年
- 菅原論貴「宮沢賢治の仏教世界-「雨ニモマケズ」考-」『禅研究所紀要』28巻・愛知学院禅研究所・1999年
- 高橋尚夫『維摩経ノート』ノンブル社 I-V・2017-2019年
- 高橋尚夫・西野翠訳『梵文和訳 維摩経』春秋社・2011年
- 武内直子『美少女戦士セーラームーン』講談社・1992-1997年。
- 鳥山明『ドラゴンボール』ジャンプコミックス全42巻・集英社・1985-1995年
- 中村元他編著『岩波仏教辞典 第二版』岩波書店・2002年
- 三浦宏文『サブカル仏教学序説』ノンブル社・2022年
- 宮沢賢治『雨ニモマケズ』青空文庫 [https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630\\_23908.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630_23908.html)
- 松本史朗『仏教への道』東京書籍（東書選書）1993年
- 渡辺照宏『法華経物語』岩波書店（岩波現代文庫）・2014年

#### Ⅳ Web 情報資料

日本テレビ (2018) 「「過保護のカホコ」 オフィシャルサイト」

<http://www.ntv.co.jp/kahogo-kahoko/index.html> (2023 年 9 月 28 日閲覧)

美少女戦士セーラームーン 30 周年プロジェクト (2023) 「「美少女戦士セーラームーン」 公式サイト

<http://sailormoon-official.com> (2023 年 9 月 28 日閲覧)

#### Ⅴ 映像資料

日本テレビ (株式会社バップ販売) 「過保護のカホコ DVD-BOX」・2018 年

映画「町田君の世界」製作委員会 (株式会社バップ販売) 「町田くんの世界 [DVD]」・2019 年

ロート製薬「メンソレータム CF『なーちゃんとゆきちゃん』篇」

<https://www.youtube.com/watch?v=TO1sYyUUYdc> (2023 年 10 月 22 日閲覧)